文教大学大学院言語文化研究科　博士学位授与概要

申請者氏名	陳新（チン シン）	報告番号	甲第４号
学位の種類	博士（文学）	学位授与年月日	2019 年 9 月 20 日
学位論文題目	日本語：接触場面における日本語非母語話者の言語調節に関する研究―相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較―		
	英語： A Study on Non-Native Japanese Speakers' Language Management in Contact Situations : Comparison of Partner and Third-Party Language Contact Situations		
審査委員	川口　良（主査：文教大学）、福田　倫子（副査：文教大学）、蒋 垂東（副査：文教大学）、芦田川　祐子（副査：文教大学）、佐々木　泰子（副査：お茶の水女子大学）		

１．論文内容の要旨

本論文は中国語を母語とする日本語学習者（以下、CNS）が、日本語母語話者との相手言語接触場面（以下、相手場面）と、非母語話者との第三者言語接触場面（以下、第三者場面）において、「コミュニケーションの達成」と「良好な人間関係の構築」という方向性に沿って行う言語調節について明らかにすることを目的として、分析視点を「スピーチレベル管理」と「発話の重なり」の 2 点に求めた。分析に用いたデータは、中国人上級学習者 16 名と友人関係及び初対面関係にある日本語母語話者 13 名、韓国人・ドイツ人・マレーシア人上級学習者 10 名の日本語非母語話者との 2 場面、各 14 組の 2 者間による自由会話、合計 28 組 560 分の自由会話である。

本論文は全 7 章 206 頁から成る。第 1 章「研究の理論的背景及び研究目的」では、研究動機、研究目的、分析視点について述べている。第 2 章「先行研究及び研究課題」では、まず、先行研究を概観し、「スピーチレベル管理」及び「発話の重なり」に関する研究は相手場面を扱うものが多く、母語場面と比較して学習者の不足点を明らかにするにとどまるという、問題の所在を明らかにした。次に、研究課題を 1.「相手場面と第三者場面における CNS のスピーチレベル管理は、親しい友人と初対面の相手に対してそれぞれどのように行われるか」、2.「相手場面と第三者場面において、CNS による親しい友人と初対面の相手に対する発話の重なり及び重なり後の談話展開には、どのような特徴があるか」の 2 点に設定した。第 3 章「研究方法」では、インフォーマント情報、データ収録の状況、研究倫理に関する手続き、文字化の方法などについて説明した。

第 4 章「相手場面と第三者場面における「スピーチレベル管理」について」では、研究課題 1.の解明を試みた。まず、「スピーチレベル」に関する用語を整理した後、伊集院(2004)などを参考に、文末のスピーチレベルを「デスマス形(P)」「非デスマス形(N)」「中途終了型発話(NM)」の３種類に分け、そのうち「中途終了型発話(NM)」は考察対象から外し、あいづち表現を含めて考察することを示した。このような分析手法によって以下のことを明らかにした。両場面ともに CNS は、「日本語のルール」に従って、「対友人」会話には非デスマス形を、「初対面」会話にはデスマス形を基調として選択する一方で、「対友人」会話、「初対面」会話ともに、相手が日本語母語話者か非母語話者かによって違いが見られた。「対友人」会話では、相手場面の方が第三者場面よりデスマス形へシフトする傾向が強く、同じ「親しい友人」であっても、相手が日本語母語話者である場合には丁寧であろうとする CNS の意識が推測された。デスマス形へのシフトの状況を発話機能によって分析した結果、相手場面では、ほとんど無意識に発せられる「あいづち」の場合にデスマス形へシフトする傾向があるのに対して、第三者場面では、「重要部分の明示・強調」という状況でスピーチレベル・シフトを行う傾向があることが分かった。一方、「初対面」会話では、第三者場面の方が相手場面より非デスマス形へシフトする傾向が強く、同じ「初対面の相手」であっても、相手が非母語者である場合には丁寧であろうとする CNS の意識が下がることが推測された。非デスマス形へのシフトの状況を発話機能によって分析した結果、CNS は、第三者場面においては「聞き手領域」に関わる発話や「聞

き手の情報要求に応じる」発話が非デスマス形へシフトしやすいのに対して、相手場面においては「話し手領域」に関わる発話や「話し手自身に向けられた」発話が非デスマス形へシフトする傾向があった。これらのことから、CNS は、非母語話者には「心的距離の短縮」と「情報伝達」を優先するのに対して、母語話者には、待遇的意味に配慮して母語話者に「へりくだる姿勢」を見せる可能性が示唆される。以上の結果から、CNS のスピーチレベル・シフトには、言語外的要因として、相手が日本語母語話者である場合にはより丁寧であろうとする「学習者独自のルール」が存在することが分かった。

第 5 章「相手場面と第三者場面における「発話の重なり」について」では、研究課題 2.の解明を試みた。まず、「発話の重なり」を、TRP(transition relevance place：ターン移行適切箇所)と高梨(2016)の「予測可能性 projectability」(投射)に基づき、「発話冒頭における同時発話」「発話終了付近における同時発話」「発話途中における同時発話」の 3 種類に分類した。次に、各場面のそれぞれの相手に対する「発話の重なり」及び「重なり後の談話展開」の特徴を分析し、以下のことを明らかにした。「親しい友人」と「初対面の相手」に対する CNS による「発話の重なり」は、両場面ともに「発話途中での重なり」が最も多かったことから、CNS は「発話の重なり」を、相手に関心を示し、会話を円滑にかつ協働的に進行させるための手段として使うことが多いと考えられる。「発話の重なり」の場面差に注目すると、話者間の親疎関係を問わず、相手場面での重なりは「発話冒頭」「発話終了付近」において多く生起し、「発話途中」においては「協調的な割り込み」が有意に多いのに対して、第三者場面での重なりは「発話途中」に多く生起し、「支配的な割り込み」が有意に多かった。このことから、CNS は相手との親疎関係にかかわりなく、相手場面では、相手が母語話者であることを意識して話者交替規則や協調的な対人関係を優先するのに対して、第三者場面では、自分の言いたいことを率直に表出することを優先することが推測された。次に、「発話の重なり後の談話展開」について観察した結果、「対友人」会話では「1.支障なく両者の発話が続行する」「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」「4.競合的に各自のフロアを継続する」の４パターンが観察され、相手場面では 1 が、第三者場面では 3、4 が有意に多かった。「初対面」会話では「1.支障なく両者の発話が続行する」「2.重ねられた話者が中断発話を再開する」「3.重ねた話者がターンを取って話題を転換する」の 3 パターンが観察され、相手場面では 1 が、第三者会話では 2、3 が有意に多かった。以上のことから、話者間の親疎関係を問わず、相手場面では相手を気づかう配慮が相互に強く働き、円滑な会話成立を優先するのに対して、第三者場面では積極的な自己表現を優先することによって対称的な会話を成立させていることが分かった。

第 6 章「総合考察」では総合的に考察した。相手場面では、CNS は問題を避けようとする意識が強く働くためにデスマス形を多用したり、意見の対立を避けて「支配的な割り込み」を控えたりするなどの、対人関係と円滑な会話成立を優先する言語行動を取りやすい。第三者場面では、目標言語の言語規範と対人関係という負担から解放され、積極的に自己表現しようとする意識が強く働き、互いに深い理解を志向する言語行動を取りやすい。また、第三者場面には言語ホストと言語ゲストの関係が存在しないため、対等の立場で協働してコミュニケーションを維持しようとする調節がなされ、会話参加が促進される。このような第三者場面における非母語話者の日本語は、インターアクションのリソースとして肯定的に捉えられ、「訂正すべき対象」ではなく「正当なバリエーション」として捉え直すべきものと考えられる。第三者場面における非母語話者の積極的な会話参加姿勢は相手場面でも活性化されるべきであり、第三者場面の日本語を会話教育へ応用するべきであるという日本語教育への提言を述べた。

第 7 章「今後の課題」では、分析対象を初・中級学習者に広げ、また、縦断的視点からも非母語話者の言語調節を明らかにすることを目指し、本研究の知見を日本語教育の現場に活用していくための方策を検討することを課題として述べた。

２．審査結果の要旨

本論文は、第三者言語接触場面に注目し、談話分析の手法を用いて、相手言語接触場面における日本語非母語話者の言語行動と比較することによって、日本語非母語話者が「コミュニケーションの達成」と「良好な人間関係の構築」のためにどのような言語調節を行っているか、その特徴を明らかにすることを試みた研究である。

本研究の意義は、これまであまり注目されることのなかった、非母語話者同士の日本語のやり取りによる第三者言語接触場面に光を当てたことにある。第三者言語接触場面において非母語話者は、自己の意見と感情を明瞭に表現し、互いに深い理解を志向して、対等の立場で協働してコミュニケーション維持を図ろうとしているという、本研究が導き出した結論は、接触場面研究における一つの研究成果として認められるものであり、日本語教育へ与える示唆も大きい。

これまで、接触場面における言語問題は、非母語話者の言語能力不足として論じられる傾向があった。そのようなこれまでの研究動向の中で、本論文が、第三者言語接触場面における非母語話者の会話の様相を詳細かつ丁寧に記述することによって、非母語話者の日本語を、インターアクションの障害ではなく「インターアクションを促進させるリソース」として、訂正すべき対象ではなく「正当なバリエーション」として、肯定的に捉え直すべきではないかと述べた第 6 章の「総合考察」は、外国人が急増してグローバル化が急速に進みつつある現在の日本社会において、日本語母語話者に対して、価値観と意識の変革、つまりパラダイムシフトの必要性を示したものと言える。また、相手言語接触場面に見られた非母語話者の日本語母語話者に対する強い意識は、「母語話者と非母語話者の間に上下関係を生じさせる要因」となり、ひいては「「非母語話者/外国人」が「母語話者/日本人」に従属した非対称的な関係」を導きかねず、第三者言語接触場面の「明瞭な自己表現と積極的な会話参加」は、母語話者に対して抑制されるのではなく、非母語話者に対するのと同様に活性化されなければならないという論考は、非母語話者に対して意識変革を求めるだけでなく、今後の日本語教育が担うべき役割と進むべき方向性を示唆するものと捉えることができるだろう。

評価される点としては、まず、研究論文としての全体的な構成が整っていることが挙げられる。読み手にとって非常に分かりやすく読みやすく記述され、誤字脱字も少ない。第 1 章では、日本社会において多様化する接触場面の様相と日本語非母語話者である執筆者自身の経験が結び付けられて第三者言語接触場面の重要性が論じられており、問題意識と研究意義が理解しやすい。第 2 章では、数多くの日本語文献に当たって先行研究がよく整理され、丁寧に記述されており、日本語の読解力、文献収集力は高いと言える。第 4 章、第 5 章では、談話の量的調査においては統計的処理が施され、質的調査においては談話例を挙げて丁寧に分析されており、談話分析の研究手法の手順を踏んでいる。さらに、大量の会話データを、短期間のうちに文字化して談話資料として完成させた努力と高い研究意欲は、特に評価されるべき点である。

不足点、改善点としては、以下のことが挙げられた。まず、第 1 章の見出しが「研究の理論的背景及び研究目的」となっているが、本論文が依拠する理論が述べられているわけではなく、先行研究に基づいた本論文の背景が述べられているに過ぎず、「理論的」というのは適切ではない。次に、第 2 章で挙げられた多くの先行研究は、ほとんどが日本語文献であり、英語文献が不足している。特に「発話の重なり」には、英語による多くの先行研究が存在するため、「発話の重なり」が論じられる第 5 章で、その英語文献を参照しながら論じてほしい部分が多く見受けられた。また、第 2 章で先行研究をまとめる際に、やや独断的な論じ方が散見された。先行研究に対する吟味及び検討は、注意深く、かつ慎重に行われるべきであろう。また、第 3 章に示された調査対象者情報及び会話情報に、滞日歴の点から母語話者との線引きが難しいインフォーマントが入っていたり、被験者の組み合せに妥当性が欠けたりするなどの難点があり、第三者言語接触場面において CNS の相手となる非母語話者の母語が統一されていないこともあって、非母語話者の母語の影響や CNS の個人差が反映されていないか、分析結果の妥当性に対してやや疑問が残る。第 4 章で行われた「スピーチレベル」に関する用語の整理は、この用語がすでに何度も用いられているので、第 2 章で行ったほうがよい。第 4 章、第 5 章で、統計的検定結果に有意差のないものについても詳細な分析が施されているが、その必要性があまり感じられなかった。

以上のような不足点、改善点が指摘されたが、先に述べたように、これまであまり取り上げられることのなかった日本語非母語話者同士によるコミュニケーションの第三者言語接触場面に注目して、量的にも質的にも十分に検討して示された分析結果は、否定されるものではなく、その分析結果によって導き出された結論とそれに基づく論考は、当該分野における研究成果として十分に認められるものである。その研究意義を高く評価し、本審査委員会は博士学位を授与するに値する論文であると判定した。